

ゾンカ語（ブータン語）の能格性

—— “格文法” の視点から ——

信 森 廣 光

今日、ブータン王国における標準語（国語）は、ゾンカ語と決められている。いわゆる、ブータン語という総称の言語はない。しかし、言語地勢学的には、このゾンカ語は、実際にブータン国内に分布している数多くの小言語のうちの一方言にしか過ぎない。にも拘らず、ゾンカ語がこれらの中で優位を占める立場に至った理由は、この国の歴史的・政治的要因に負うところが大きい。ヒマラヤ連山東部一帯の中で19世紀以降、たまたまゾンカ語が王の言葉であったことから、王権の伸長とともにブータン中央部から周辺部へこの言語の通用範囲が徐々に拡大し、ようやく1980年代半ばから標準語として確立したものである。従って、ブータンにおける言語の研究に着手するとき、このゾンカ語から始めるのが最も適当であると思われる。

言語類型的に言えば、このゾンカ語は、構造的にはチベット・ビルマ語群に属し、いまだに旧東アジア諸語の特質を多く保有している言語の一つである。また、通時的にみれば、この言語は、直接的には北に隣接するチベット語を基にした派生言語でもあって、当然、その構成要素の多くを継承している。チベット文字の借用は言うに及ばず、これを文字素として、口語化した現代ゾンカ語の音韻体系に合致するよう、チベット文字にかなりの変形や修正を施している。それでも、綴字上の読みと実際の口語読みとの間には、かなりのずれがあることは理解しておかねばならない。この表記法の問題は、今後の課題としてゾンカ語の正書法の確立が待たれるのである。また、語彙素の面でも、チベット語に依存するところが多く、特に宗教用語においては、殆どが古典チベット語の語彙をそのまま使用しているのが現状である。しかし、今日のゾンカ語が、歴史的過程において徐々にチベット語離れをし、独自の方向へ言語発達を遂げつつあることもまた事実である。

本稿では、幾多の言語学的特性を持つゾンカ語を、文法理論の中でも、このゾンカ語に優れて特徴を示す格体系に関して、格文法理論の観点から検証してみる。特に、“能格性”の実体に焦点を当てて分析していく。

今迄、能格言語に関する研究の端緒は、1960年代後半から始まり、もっぱら、コーカサス北部の言語群を対象にして取り扱われてきたもので、東アジア地域の諸言語についての能格に関する研究実績は、いまだ余りその例を見ない。いわんや、今回、取り上げるゾンカ語については殆ど無く、今後の研究を待つかない。

元来、能格言語という呼称は、格文法概念の枠内で生じたもので、Fillmore の *Case Grammar* (1968) において初めて、能格の考え方が文法理論の一特性として主張されたものである。そして、Lyons (1968) にも、Chomsky の G B 理論 (1981) の中でも、文法研究の課題の一つとして言及されている項目である。

問題点は、先ず統語分析を試みようとする対象言語に、能格性の事象が、本質的に実在するか否かを究明することである。この能格という概念については、研究者によっては、いささかニュアンスの差異があるものの、基本的な考え方においては大差はない。つまり、格関係において、自動詞を含む文の主語（通常は主格）が他動詞を含む文の目的格（対格）と同一の格形態を保持していて、真正の他動詞を含む文の主語（真正主格）とは全く

* 文中のゾンカ語に関する言語資料は、ブータン王立ゾンカ語（国語）教育研究所の Jagar Dorji 所長、及びブータン文部庁次官 Lopen Choechoangla 氏よりの提供による。

異なる格形態を示すということである。この場合、主語となる動作主が、他に向けて行為を発する deixis を指示する故に、他動詞を含む文の主語の格が能格化したことを意味する。この考え方で、一般に能格性なしと言われる現代英語を例にとると、普通、表層構造には明確な能格標識は出現しないものである。しかし、相互が対応関係にある自動詞と他動詞が同一意味内容を共有する僅かな動詞に限っては、この双方に能格性があるとも言えぬこともない。しかし、対格性の色彩の強い英語を含めての印欧語の場合、この解釈にはやや無理がある。この際、他動詞を含む文の主語は、その行為を惹起させる動詞とともに、格範疇からして、能格言語のものであると言える。そして一般に、これと対応関係にある自動詞の方を能格動詞と位置づけるのが普通である。

Chomsky は、英語について、GB理論の主題役割として、対応関係にある文の基底にはD構造が実在すると推定し、それ故、能格動詞自体は格を所有せず、目的語の方が主語の位置に語順転位して、表層構造に現れるとする。しかし、Lyons は、やや異なる立場に立ち、他動詞構造は、自動詞構造から能格変形、或いは使役変形のプロセスを経て派生したものと述べている。意味的に考えてみても、私には、この Lyons の概念の方がごく自然で、素直であるように思える。それは、通時的に見て、動詞は本来、言語の起源から自動詞であったし、主語を強調し、主題化する性質を有していたはずである。そして、能格タイプの言語では、統語上、能格を他動詞の主語にして、別の格を自動詞の主語、及び他動詞の目的語にさせるからである。

このような視点に立てば、格文法における統語構造の基底は、テンス・アスペクト・モダリティ、否定などの成分と、命題との二つの最大構成要素で成り立っていることになる。さらに、この命題は、動詞と格範疇とに下位区分され、後者は、深層格と名詞句の合体であることになる。この際、名詞句の表層格形が多様性を示すのは、特に、人称代名詞の場合が顕著であることに注意せねばならない。そして、同時にこの格範疇は、能格動詞によって制約された格枠を持つことになり、この範囲内では決して義務的ではなく、恣意的にどれもが主語の地位に付くことができるのである。

上述したような格概念の設定を前提として、初めて、統語構造上、それぞれの構成要素の異なる意味関係を解析することが十分可能になる。勿論、命題の部分に如何なる格範疇が出現するかは、個々の動詞の性質に応じて異なるし、また、各々の動詞が要求する格範疇は、格特性として個々の動詞によって制約されるのである。それ故、能格言語となるものは、統語上の呼応関係を持つ能格動詞とともに、行為の動作性、或いは原因を示すものであるから、真の意味での主語化を持ち得ないことになる。

以上、格理論の一部について述べてきたが、ここからゾンカ語の統語関係において、能格性が如何ように言表化されているかについて具体的に検証してみる。

II

ゾンカ語には、表層構造上、印欧諸語のような人称や、数における一致という屈折特性はない。これに代わるものとして、テンス・アスペクトやその他の意味ニュアンスを表象するための言語手段がある。それは、格接尾辞や小辞、及び補助詞等々の形態素の付加である。そして、これらの構成要素が適切な配列と組み合わせの手順を経て、文の成分となり、固有の統語構造が実現されるのである。

まず、ゾンカ語の格接尾辞による格体系から述べよう。一般に、ゾンカ語では名詞形態論上、4つの格形式が認められている。即ち、本来的に、属格、与格、奪格、及び処格などである。これらの格接尾辞が、各々の名詞句に付与されることによって表層に出現し、構造化されて直ちに統語機能が生じる。

その接尾辞の形態は、①属格には -gi (གྱི་གྱི་གྱི་), ②与格には -lu (ལུ་), ③奪格には -lä (ལཱ་), ④処格には -na (ལྟ་) などがある。それぞれの意味内容においては、通常の有格言語と比べて、ゾンカ語には若干の特異性があるので注意を要する。即ち、①属格は、所有関係や事物の一部分を表し、②与格は、行為の着点やその位置を表す。また、この与格構造にも属格に似た連体的(所有的)な性質があるのは興味深い。③奪格は、行為の起点やその着点を示し、④処格は、場所や方向を示す。例えば、次の通りである。

- ① 属格 = gelong-gi (གཤེན་གྱི་) (僧侶の), ntshang-gi (ལྟ་མཚན་གྱི་) (妻の),
phoge-gi (ཕོ་མཚན་གྱི་) (男の)
- ② 与格 = 'lopdrap-lu (ལྟ་ཕྱུ་ལུ་) (学生に), nga-lu (ང་ལུ་) (私に),

āmtshu-lu (ཨ་མ་ཚུ་ལུ་) (女に)

③ 奪格 = gyep-lä (རྒྱལ་པོ་ལས་) (王様から), āp-lä (ལ་པ་ལས་) (父から),
lopön-lä (ལོ་པོ་དཔོན་ལས་) (教師から)

④ 処格 = Punakha-na (ཕུ་ན་ཁ་ནང་) (プナカにて), di-na (དི་ནང་) (そこに),
tshik-na (ཚིག་ནང་) (言葉で)

など、規則的に形成される。

この他に、ゾンカ語には主格と能格がある。しかし、主格は有標の接尾辞を持たず、名詞句そのままが主語となり得る点では、他の諸言語と変わるところはない。しかるに、能格の場合、ゾンカ語独特の意味機能を持つので重要である。これについては以下論述する。

形態面から見れば、ゾンカ語の能格接尾辞は -gi (རྒྱུ་ཀྱི་གེ་) である。一見すれば、これは全く属格形と同一形式であるが、その意味機能の点では全く異なることは明白である。通時的解釈では、もともと属格と能格は、合体した一つの格であったものが分岐して、より細かい格機能を有するようになったもので、形態は依然としてそのまま保持した、とする説もあるが、むしろ現代ゾンカ語の能格は、他言語で言う“具格”の機能に近いように思われる。また与格についても、ゾンカ語の意味機能では印欧諸語のものとはやや異なる故、多少の説明が必要であろう。即ち、動詞によって、或る行為が誰か何かに及ぶとき、着点の指示には与格を適用しなければならない。つまり、被動者は必ず与格にしなければならないことである。これは英語のような対格言語においては、直接目的語となる対格の機能に相当する。しかも、人物動作主の場合の奪格の機能は、ゾンカ語ではこれも与格に該当する。この点で、ゾンカ語の与格機能が、印欧諸語の如き対格言語とは、本質的に如何に相違しているかが判明するのである。

現代英語では、当然、これは文構造内の直接目的語(対格)として位置づけられるが、一方、ゾンカ語では、能格動詞が「目的語を対象として指示する行為」を言表化するときには、必ず与格でなければならない。さらに、この与格接尾辞は、前述した如く、場所や方向すら指示するのである。例えば、次の如くである。

場所 = ÷im-lu (ཁྱིམ་ལུ་) (家で), drung-tsho-lu (དྭང་ཚོ་ལུ་) (医者ので)

方向 = Thimphu-lu (ཐིམ་ཕུ་ལུ་) (ティンブーの方へ), gayara-lu (གཡེ་ར་ལུ་) (皆の方へ)

など、その特異性がよく伺える。

さらに、ゾンカ語には第3と第4の格として、奪格と処格があるが、その意味機能は、既述した如く、格体系を有する他の諸言語と大差はない。

ゾンカ語の能格接尾辞 -gi を接合付与する際、音韻上の特定条件がある。それは、付与される名詞句の語末の音素の性質に応じて、若干、正書法上の規則に従うことである。綴字上は、全く属格付与の場合と同じ手続きを取り、外見的には同形であっても、あくまでこれらは同音異義語であって、その統語上の意味機能が全く異なることは、既に述べた通りである。

また、ゾンカ語の能格の意味機能は、古典チベット語の能格とも違って、古典語の方は他動詞の主語、または動作主のみを指示するが、他方、ゾンカ語の能格は、もっぱら他動詞的 (verbum transitivum) 行為、或いは自動詞的 (verbum intransitivum) 行為を遂行する「主語の動作主的特性」を強調するだけの役割に徹しているところが大きな特徴である。

翻って、ここでゾンカ語の能格性が、統語構造の中に典型的に出現するための必須条件とは一体何であるか。また、この条件を完全に満たすために共起が許される構成要素には一体何があるか、を具体的に考えてみよう。整理すると次のようになる。即ち、①能格動詞との共起、②与格形との併用、③小辞 *bä* (པས་) / *wä* (པས་) との対関係、④補助詞(または、助動詞と呼んでもよい) 'ing (འིན་) / 'immä (འིན་པས་) との共起などに類別できる。

順次、これらの文例を挙げる。

(1) 能格動詞との共起

ゾンカ語で、能格動詞に該当するものには、次の類型動詞がある。

| | | |
|-------------------|----------------------|---------------------------|
| nyen (ཉེན་) (聴く) | gön (ཀུན་) (着る) | thön (ཐོན་) (聞く) |
| nye (ཉལ་) (眠る) | thung (འཕུང་) (飲む) | za (ཟ) (食べる) |
| dam (བཟམ་) (閉じる) | yö (ཡོད་) (～が在る) | čö' nang (ཚོས་གནང་) (教える) |
| go (དགོ་) (欲する) | be (འབད་) (～する) | dö (བློན་) (座る) |
| ong (འོང་) (来る) | jo (འཇོ) (行く) | 'lap (སྟལ་) (言う) |
| śe (ཤེས་) (知っている) | ta (ཐོན་) (送る) | thong (མཐོང་) (見る) |
| zha (བཞག་) (置く) | tshi (རྩམ་སྟེ) (燃える) | bo (འཕོ) (こぼす) |

などいくつかがある。以下、文例を挙げる。

① འཇི་མི་ད་ཀྱིས་ལྟོ་མཚམས་ཁ་ཤེས།

Čimi-gi Lhotshamkha śe.

チミ (能) ネパール語 知っている

[チミ (人名) は、ネパール語を知っている] (ネパール語が話せる)

② རྩོད་ཀྱིས་དེ་གི་དབེ་ཆ་ག་ཏེ་བཞག་ཅི།

Čö-gi ngi-gi peča gāti zha- ci?

君 (能) 私の (属) 本 どこに 置く (過去マーカー)

[君は私の本を、どこに置いたのですか?]

③ ད་བཅུས་ཀྱིས་སྒྲིལ་ལྟོ་མིག་བཞུགས་ད་ཡི།

Ngace-gi go demi cap- da- yi.

私達 (能) ドア 鍵 掛ける (現在動名詞) (過去マーカー)

[私達は、ドアに鍵を掛けた]

④ དེའི་ཀུ་ལྟོ་དེ་རྩམ་གསེང་སྟེ་རྩམ་སྟེ།

Ngi-kitap di ču-gi bang- so- nu.

私の本 (冠) 水 (能) 濡れる (完了) (推断過去マーカー)

[私の本は、水で濡れてしまった]

⑤ ད་གིས་ལྟོ་ད་དེས་བཞག་མ་མཐོང།

Nga-gi čö dari- gā ma thong.

私 (能) 君 今日 まで ~ない (過去否) 見る

[私は、今日まで君に会っていなかった]

上文例①~⑤までに挙げた動詞「知っている」、「置く」、「掛ける」、「濡れる」、「見る」などは、いずれも主語が能格になることを要求し、主語の行為を強めている。

①文では、3人称固有名詞、「チミ」に能格接尾辞を付すことによって、主語の「知っている」や「話せる」ことが強調される。②文では、2人称代名詞「君」を能格にすることによって、「置く」人が誰なのかを指示し強めている。しかし、ここの第2配列の ngi-gi の gi は、属格 (接尾辞) であって、能格形ではない。また、文末の -ci は、過去時制のマーカーであって、能格性の問題とは関わりはない。③文には、主語となる1人称複数代名詞が主語の位置にあるが、cap (掛ける) 動詞の影響で、この場合、能格接尾辞が「私達に」付与され、誰が確実に行為をしたかが強められている。この文中の、da は現在動名詞であり、yi は過去時制マーカーであ

* ラテン文字によるゾンカ語の転写表記は、IPA記号のものではなく、筆者の表記法による。

て、ともに統語機能上は重要な構成要素ではあっても、能格性の点では直接の関わりはない。④文では、「水」が能格に置かれているが、「水」という手段で「濡れる」理由を強調したもので、能格の具体的機能を示す場合である。なお、「本」に後接された *-di* は、その機能は冠詞であり、ここでは、「水」を指示限定している。また、能格性とは直接関わらないが、*so* は完了アスペクトの完了マーカ―を示し、文末にくる *-nu* は推断過去時制マーカ―である。⑤文では、1人称代名詞、「私」が主語の位置に置かれているが、能格動詞「見る」の要求で拘束された能格形として、他の誰でもない「私」が「見る」ことを明白に主張している。なお、文中の *ma* は過去時制の否定辞で、動詞「見る」を直接に否定している。その位置は、ゾンカ語では常に動詞の直前にある。この他の動詞についても、主語に能格性を求めるものが多々ある。

(2) 与格との併用

能格言語では、印欧諸語の対格に相当するのが与格であり、この格は能格と併用されて、「話題化」のために文中で幅広い有効性を発揮する。前述した如く、ゾンカ語では、能格接尾辞形は、一般に生物主語（または、人物動作主）と非生物目的語（または、事物被動者）とが、他動詞によって、誰かが誰かに何かを為すということとを統語関係で明確にさせるために接合されるのである。つまり、主語は、能格形に置かれ、同時に対格は、直ちに与格形へと転換されねばならない。以下、これら両格併用の文例を挙げる。

① མོ་གིས་ང་ལ་དྲུག་པོ།

Mo-gi nga-lu ga.
彼女（能） 私（与） 愛す
[彼女は、私を愛する]

② བྱིས་ཀྱིས་ང་ལ་སློབ་མ་བྱིན།

Cö-gi nga-lu tön ma bjin.
君（能） 私（与） 教え ～なかった（過去否） 与える
[君は私に、その方法を教えてくれなかった]

③ ཁོ་གིས་ང་ལ་ཅན་ལ་ལྟ་སློབ་ཀྱི།

Kho-gi ngace-lu ta dö- nu.
彼（能） 私達（与） 見る 座る（推断過去マーカ―）
[彼は、私達を見ながら座っていたようだ]

上記、①文では、3人称代名詞「彼女」こそが、対象の「私」だけに愛する気持ちを抱いているのであって、その愛情は他の誰からでもない。従って、強勢される「彼女」は、能格形でなければならない。能格形と与格形の立場が動作主と被動作主という関係において直結していることを示している。②文では、「君」だけが能格形にあって、それは他ならぬ与格形の「私」だけに対してであり、その行為の動作主「君」が強調されている。なお、*ma* は過去否定辞であって、動詞の直前に置かれ、動詞を直接に否定する状況語である。③文には、「彼」一人が居て、能格形として、与格形の「私達」だけに目を向けている行為は、まさに、主語の態度を明確にしている好例である。この2つの動詞 *ta* と *dö* の複合用法もゾンカ語の特色である。また、小辞 *nu* は推断過去マーカ―である。

さらに、語用上注意すべきは、ゾンカ語が、他の能格言語とやや異なるところは、特に次の条件の場合、即ち、①動詞が他動詞であるか、②主語が生物性（人物）であるか、のいずれかのときには、しばしば能格接尾辞を必要とすることである。何故なら、これらの表層条件が整った場合のみ、主格が能格と交替し、能格性の素性が主語に加味され、文構造内でより具体的にその意味的特性を発揮するからである。

しかも、こうした事象は、能格動詞が現在時制にあるときだけでなく、過去時制においても同様に起こり得る。何故なら、ゾンカ語の能格形が持つ「動作主的」意味内容が、統語脈絡においては、その時制の如何に拘らず、時の制約を全く受けることなく、より適切であり得るからである。

(3) 小辞 *bä* (པམ་) / *wä* (བམ་) との対関係

先の項で、ゾンカ語では、能格性の表出のために、共起する組合せ条件が決定的であること、しかも特定の性質を有する動詞に限られることを縷々論述してきた。特に、不変状態動詞の能格支配の頻度が著しく高いのもその特徴である。まさしく、これらの動詞との対関係において用いられるのが、ここで例証する強調小辞 *bä* と *wä* なのである。その意味機能は、ごく最近に入手した「知識や情報」を示すことである。以下文例を挙げる。

- ① ཁོ་གི་པམ་ལ་པ་གི་སྐབ་སྐབ་མི་ཉམ་པམ།
 Kho-gi 'apa -gi 'lap'lap mi- nyen bä.
 彼(能) 父の(属) 言葉 ~ない(現否マーカー) 聞く(強勢マーカー)
 [彼は父の言うことを聞かない](~を聞き入れようとしな)

- ② རྒྱལ་གྱི་མཁའ་ལྔ་གི་ཤོག་འཛིན་དེ་འཕྲོབ་པམ་ག།
 Čö-gi 'namdru-gi šokdzin-di thop bä ga?
 君(能) 飛行機(属) 切符(指示) 得る(強勢マーカー)(疑問小辞)
 [君は飛行機の切符を入手しましたか?](既に手に入れたはず)

- ③ ཁོ་གི་པམ་མོ་ལ་དགའ་པམ།
 Kho-gi mo-lu ga wä.
 彼(能) 彼女(与) 愛する(強勢マーカー)
 [彼は、彼女を愛している](~のことは間違いない)

- ④ ཁོང་གི་པམ་དང་པམ་ལ་འཇམ་པམ་གྱི་སྐབ་དང་གི་སྐབ་གི་པམ།
 Khong-gi ngace bo-bi kē nga-gi go wä.
 彼ら(能) 私達 呼ぶ 声 私(能) 聞く(強勢マーカー)
 [彼らが私達を呼んでいるのが、私には聞こえる](自分だけが聞き取れる)

上文例に見る *bä* と *wä* は、ほぼ同様の意味で用いられるが、その実際の使用頻度は、むしろ *bä* の方が幾分高い。いずれも能格にある主語と能格動詞の意味を補強するためのものである。

①文では、文中の話者は、たった今、文の主語たる「彼」の行為を観察したばかりであり、他方、②文では、話者は、主語が既に、確実に「得た」ことを予知していることを示唆している。

このような意味ニュアンスには、当然、主語は能格形にならねばならず、*bä* と *wä* は、確かにその強勢補助の役目を果たしている。なお、①文中の「父」の *-gi* は、属格接尾辞であって、能格のものではない。また、*mi* は現在否定のマーカーで、能格性とは関わりがない。②文の「飛行機」の *-gi* も属格形であって、能格性とは無関係である。そして、*di* は指示詞、*ga* は疑問詞である。

③文と④文中には、*wä* が出現しているが、*bä* との語用上の弁別について多少とも触れれば、音韻上の理由で次のようになる。即ち、ゾンカ語では、能格動詞の語幹末の音素の性質によってどれかが決まる。しかも、それは開母音語幹を持つ動詞に限られ、硬母音のものには *bä*、軟母音のものには *wä* が適用される。しかし、両小辞ともが、等しく主語の能格性を高めることに変わりはない。

③文では、能格にある「彼」によって、与格にある「彼女」に愛を与え続けていることは間違いない、と話者は確認している。前出の類似の文例との相違点は、wä の挿入によって、この事実がより強調されることにある。④文では、能格にある「彼ら」の為す行為全体が能格の「私」だけに伝わるのであって、他の誰かには感知できないかも知れないことを話者は主張している。主文と副文のそれぞれに能格主語が配置されているのもこの理由による。

上文例から分かる如く、小辞 bä/wä の義務的意味機能は、「得た知識や情報」を話者が認知することであり、統語上、重要な役割を担う。これらは能格動詞の規則不定詞形とともに用いられ、その直後に置かれる。そして、出来事の状態や状態の移り変わりを示し、文中に言表化されたその情報が、主語によってつい先刻に得られた知識であることを伝える。逆に、これらの小辞がゼロ出現の場合は、文中に表現された状況が、もともと話者の生得の知識内にあったものか、それとも話者が既に以前から承知していた事項なのかを示唆し、少なくとも、それを最近に知った知識でもなく、またごく最近に観察した事象でもないことを意味するのである。従って、bä、wä の出現と不出現の能格性に対する差異は、前者は話者がたった今知り得たこと、後者は、話者が事前に既知の情報として入手していたことにある。

もう少しここで、不変状態動詞の能格支配の根拠について考えてみよう。形態的に見ると、この種の動詞の現在時制形は、語幹のみで成り立っていて、意味論上、真正の現在時制を示すかと言えばそうではなく、それはあくまで非時制の不定動詞形に過ぎない。言い換えれば、現在時の時の幅を含む語義素そのものである。その意味内容は、状況の持続性、固有性、客観性、或いは状態の継続性などを表示する。本来的には、こうした状況・状態を表出する動詞のみが不変状態の現在時に適用され得るのであって、決して行為動詞がこれに関わることはないのである。

III

上記の小辞 wä の他に、ゾンカ語にはこれと複合形態を成す派生語 dowä (དོགས་) がある。この小辞も、能格性を補強する要素として重要なので、次に述べておく。分析的に見ると、do と wä の複合形の意味機能は、本動詞の進行相を表示し、「～している」状況を伝える。以下、文例を挙げる。

① མོ་གིས་མི་གཡ་ལ་སྤུ་རྒྱ་ལྷན་དོགས་།

Mo-gi 'mi gayara-lu 'ja 'lu dowä.
彼女(能) 人 各々に(与) 茶 注ぐ (進行マーカー)
[彼女は、各人にお茶を注いでいる]

② ང་གིས་ལྗོན་ལམ་ནང་འཕར་དོགས་།

Nga-gi 'nyilam-na phu dowä.
私(能) 夢 ~の中 飛ぶ (進行マーカー)
[私は、夢の中で飛んでいた]

③ ཁོ་གིས་ག་ཅི་སླབ་དོགས་།

Kho-gi gaci 'lap dowä?
彼(能) 何 言う (進行マーカー)
[彼は、何と言っていたの?]

上文例の①文から、dowä の働きによって、主語の「彼女」は能格となり、いわば、話者が、「彼女」一人によって為される「注ぐ」だけの行為を真近で観察していることを示す。「各々」が与格形であるのは、既述した如く、ここでは方向性を表す機能が働いているからである。もっと詳しく言えば、話者の発話中、能格主語の行為自体は終結したことが、この小辞の機能によって話者の意志が動機づけられていることがよく分かる。それは、行為そのものの完了終結を表示するためではなくて、過去時における deixis の時点でも、継続中であった行為を表現しようとする話者の心的態度を含意的に表明しているからに他ならない。

②文は、1人称の話者自らが能格主語として遂行した行為が、過去時においてなおも継続中であったという発話を動機づけている。この場合、dowä の挿入はきわめて妥当で、統語的に意味を成す可文である。それは、その出来事が全く「夢の中」の状態にあるという脈絡の中で起こっているからである。しかも、1人称の話者ですから、事実を目撃したとしても、当該の行為がいつ終結したのか、それとも続行中なのかについて正確に判別できないばかりでなく、全く意識していないからである。③文では、話者は、疑問構造によって過去時における或る時点で、主語が「為した」主張について確認したい意図を示している。しかるに、話者としても、「彼」が、聴者に対していまだにその主張を留保しているか否かについては、予知できないままである。しかしながら、ゾンカ語の慣用からして、1人称に関しては、本動詞に対して直接、この dowä を挿入することは非文ではないが、余り好まれない。それは上述の理由による。

ついでに、この項で述べた小辞 bā、wā、dowä などの否定構造について言及すれば、たとえ否定辞 mi/ma の挿入によって文否定が実現されたとしても、主語に能格性を義務づける役割には少しも変更はなく、統語上に影響を及ぼすことも一切ない。

因に、ゾンカ語では、否定構造には否定辞 mi (མི་) / ma (མ་) を使用する。現在否定には mi、過去否定には ma が使われる。これらの役割の文統語の中での重要性は、単に否定だけでなく、現在時・過去時の弁別を指示する有用な要素であることにある。これ以上の論述は、統語論にまで深入りすることになるので、次回に譲る。

(4) 補助動詞 'ing (འིང་) / 'immä (འིམ་པ་) との共起

次に、能格関係を制約する補助動詞(または、状況語)について検討しよう。ゾンカ語に特有なこの 'ing (འིང་) / 'immä (འིམ་པ་) は、「～である」を意味する一種の状況語で、能格動詞としても統語上、重要な成分である。その語用は、時制の設定が事実現時の場合に限って、本動詞の活用語幹の後に、この補助詞を共起させて、相互に連動させることである。

この際、活用語幹末の音素を、音韻交替させる手続きが必要となる。2通りの方法を取る。即ち、活用語幹末が、①既に鼻音 ng、n のときには m に交替される。但し、規則動詞の活用語幹末が既に m 音のときは、音韻交替はないが、直前の短母音を必ず長母音化させねばならない。②既に p 音であるときには、交替は起きない。また、③開母音語幹末の動詞には、その性質に応じて、硬語幹には u、軟語幹には p を付与する標準規則がある。以下、文例を挙げよう。

① ལ་མ་གྱིས་ཚོས་གནང་མ་འིང་།

Lama-gi cōnām 'ing.

ラマ(能) 教える (状況マーカー)

[ラマ僧が教えている] [< cō'nang (ཚོས་གནང་)]

② ང་བཅས་ལྷོ་ལྷོ་པ་འིང་།

Ngace-gi nā dōp 'ing.

私達(能) ここ 座る (状況マーカー)

[私達は、ここに座っている] [< dō (ལྷོ་ལྷོ་)]

③ ང་བཅས་གནམ་གྱི་ཕྱོག་ལས་འབད་འཁྱོལ་འིང་།

Ngace 'namdru-gi tholābe jou 'ing.

私達 飛行機(能) 今 行く (状況マーカー)

[我々は飛行機で今、飛んでいる] [< jo (འཁྱོལ་)]

④ ཁོ་གི་ཤ་ཟུག་ལྟོག་པས།

Kho -gi ša zau 'immä.

彼（能）肉 食べる（状況マーカー）

〔彼は肉を食べている〕〔< za (ཟུག)〕

⑤ མོ་གིས་ལྷ་རིའདྲེགས་སྲི་སྲི་འབད་པར་ལྟོག་པས།

Mo -gi gāri drōsisibe tām 'immä.

彼女（能）自動車 無茶に 運ぶ（状況マーカー）

〔彼女は、無茶な運転をしている〕〔< ta (པར)〕

上記の①、②、③文は、'ing の用例であり、④と⑤文は、'immä の使用例である。これら両成分の語用上の区分については、ここでは触れない。しかし、能格性に関しては、前者の方が、その出現頻度は高いようである。

①文では、主語がこの状況語に拘束されて能格形を示し、形態的には本動詞の語幹末の ng が m と交替している。②文でも同じく、また、本動詞の活用語幹末に p が付与されている。③文では、能格形は、「飛行機」によって指示され、強調されている。本動詞には u が付与されている。④文では、能格主語の「彼」が「食べて」いるのであって、他の人ではないことを文末の状況語が補強している。本動詞には u が付与されている。⑤文でも同様に、「彼女」が「運転して」いる状況にあるので、「彼女」は当然、能格形でなければならない。また本動詞に m が付与されている。

③文について、もう少し詳細に述べると、文中の 'ing は、話者自らが「飛行中」である事実を伝えている。このように、1人称主語と 'ing とが対となって併用されることはゾンカ語では珍しくない。それは、この話者が最も自然の状況で1人称の deixis から個人的情報を披瀝しているからである。このことは同様に、2人称の deixis に関しても適用されてよい。何故なら、話者が発話対象たる聴者に向けて状況を説明し、2人称の人物が何らかの反応を示すであろうことを推定しているからである。さらに、この 'ing の存在は、話者が発話した事実について絶対的に確かであるときには、3人称の deixis に関してさえも適用できるのである。

興味ある事項は、上述の音韻交替規則が、能格動詞以外の全ての動詞形に共通して適用され、殆ど例外がないことである。さらに、動詞から派生する動詞状名詞類・分詞類・進行相の形式などにも当てはまる。しかし、これは動詞派生形態論に関わる事項であるので、ここでは割愛する。

また、状況マーカーの機能を持つ、これらの補助詞 'ing、'immä は、主語に能格性を義務づけるだけでなく、テンス・アスペクトの領域にも強制力を及ぼし、現在時・過去時における出来事の実実性を表出するものとして重要な成分であることに注目しなければならない。

この他、ゾンカ語には、主語に能格性を及ぼす成分として、ong (འདྲ) があり、これは潜在的可能性を意味する小辞であるが、単独では、前述した各要素ほどの強制力はない。しかも、殆ど wacin (པཅེན) / bacin (པཅེན) 「もし～なら」を伴った条件文という特定の枠内でのみ共起し得るものなので、ここでは省く。

以上、想定し得るあらゆるケースについて、ゾンカ語の能格性の実体を検証してきた。結論的に言えば、この能格性の表現は、常に、能格動詞や小辞や補助詞などとの結合関係においてのみ有効に実現し得ることが明確になった。そして、ゾンカ語の場合、動詞の要件は、それが他動詞であっても自動詞であってもよく、ただ、主語の動作主的特性を強調するためだけでよいことが判明した。この能格性の特異な実体は、ゾンカ語の統語理論の解明へと展開させるに十分な関心を抱かせるほど、言語学的には最も興味深い捨象された事象の一つと言わねばならない。

(1993年11月30日)

References

- (1) Fillmore, C.J. (1968): "The Case for Case", In Bach, E. & Harms, R.T. (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, New York: Holt, Rinehart & Winston.
- (2) ———. (1971): "Towards a Theory of Deixis", The PCCLLU Papers, Department of Linguistics, University of Hawaii, III, No.4.
- (3) Chomsky, N. (1981): *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- (4) ———. (1980): *Rules and Representations*, New York: Columbia University Press.
- (5) Lyons, J. (1981): *Language and Linguistics, An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (6) ———. (1977a): "Deixis and Anaphora," In T. Myers (eds.), *The Development of Conversation and Discourse*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- (7) ———. (1977b): *Semantics, I, II*, 2 vols., Cambridge: Cambridge University Press.
- (8) Driem, G. van (1992): *ཇོང་ཁའི་པད་ལྗོངས་པའི་ཡུལ་ལྗོངས་* (Dzongkhai Datröbi Zhung), རྒྱལ་ཡོད་ཡུལ་ལྗོངས་ཡུལ་ལྗོངས་ཡུལ་ལྗོངས་ཡུལ་ལྗོངས་། Royal Government of Bhutan.
- (9) Dorji, S. (1990): *ཇོང་ཁ་རབ་ཀ་སལ་ལམ་བཟང་* (Dzongkha Rabsel Lamzang), རྒྱལ་ཡོད་ཡུལ་ལྗོངས་ཡུལ་ལྗོངས་ཡུལ་ལྗོངས་ཡུལ་ལྗོངས་། Royal Government of Bhutan.
- (10) Ivir, V. & Kalogjera, D. (eds.) (1991): *Language in Contact and Contrast*, The Hague: Mouton de Gruyter.
- (11) Kasher, A. (ed.) (1991): *The Chomskyan Turn*, Oxford: Blackwell.
- (12) Taylor, J.R. (1989): *Linguistic Categorization*, Oxford: Clarendon Press.
- (13) Vieregge, W. (1989): *Phonetische Transkription*, Stuttgart: F. Steiner Verlag.
- (14) Buszkowski, W. (ed.) (1988): *Categorial Grammar*, Amsterdam: J. Benjamins.
- (15) Croft, W. (1991): *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, Chicago: University of Chicago Press.
- (16) Gessinger, J. & Rahden W. von (1989): *Theorien vom Ursprung der Sprache*, Bd.1., The Hague: Mouton de Gruyter.
- (17) Starosta, S. (1988): *The Case for Lexicase*, London: Pinter Publishers.
- (18) Hageman, L. (1991): *Introduction to Government and Binding Theory*, Oxford: Blackwell.
- (19) Lasnik, H. & Uriagereka, J. (1988): *A Course in GB Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- (20) Napoli, D.B.J. (1989): *Predication Theory*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (21) Goldstein, M.C. (1991): *Essentials of Modern Literary Tibetan*, Berkeley: University of California Press.
- (22) Abraham, W. (1991): *Discourse Particles*, Amsterdam: J. Benjamins.
- (23) Helbig, G. (1992): *Probleme der Valenz- und Kasustheorie*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- (24) Fleischman, S. & Waugh, L.R. (1991): *Discourse-Pragmatics and the Verb*, London: Routledge.
- (25) Batz, R. von & Bufe, W. (1991): *Moderne Sprachlehrrmethoden*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- (26) Schwegler, A. (1990): *Analyticity and Syntheticity*, The Hague: Mouton de Gruyter.